

## 倉嶋 厚さんを偲んで

本学会の倉嶋 厚名誉会員は、本年8月3日に逝去された。

倉嶋さんは、1924年長野市に生まれ、太平洋戦争の敗色が漂い始めた1942年に中央気象台附属気象技術官養成所本科（現気象大学校）の門をくぐられた。当時、戦時要員の確保のため学生の採用は90人と、通常の約15名を大幅に膨らみ、加えて軍関係者などを含めると約160人に上った。倉嶋さんは1944年9月首席で卒業後、海軍技術少尉に任官された。その後、終戦を機に中央気象台に復員され、さらに翌1946年には上記養成所の研究科に10人ほどの仲間と合格し、再び3年間を学舎で過ごされた。

倉嶋さんは93歳で逝去されるほど直前まで、70有余年に渡って、文字通り気象一筋の人生を送られた。しかも倉嶋さんは幸運にも、いやその天賦とも言える才能と努力の賜物で、「三つの人生」を送った異色の気象人として、永く語り継がれるに違いない。

一つ目の人生は、もちろん気象庁での仕事。本庁予報課を駆け出しに、札幌管区気象台予報課長や本庁主任予報官など予報畑を中心に仕事をされた後、1984年鹿児島地方気象台長を最後に定年退職された。その間、1968年には「動的概念に基づく東アジアの冬と夏の季節風に関する研究」で東京教育大学（現筑波大学）より理学博士の学位を取得されている。このような仕事が「藤原賞」の受賞につながった。

二つ目は定年退職に引き続く「天気キャスター」、三つ目が「気象作家」である。この二つは決して独立ではないが、倉嶋さんをして、一躍メディアの寵児に押し上げたことは確か。実際、多くのテレビや新聞が、倉嶋さんの訃報で、一世を風靡した「天気キャスター」、「気象エッセイスト」、「お天気博士」などと惜しんだ。ちなみに「気象予報士」制度が生まれたのは1994年で、倉嶋さんが「天気キャスター」の時代であった。受験はされなかったが、万人が認める「スーパー気象予報士」であった。

私事で恐縮だが、筆者は倉嶋さんと同じく気象庁に40年席を置いた。しかしながら、倉嶋さんの在職時



は、気象研究所に居たことと、年の差が一回り以上ということもあって、仕事での付き合いはなかった。ただ、倉嶋さんが、現在でも毎年本庁で行われている「全国予報技術検討会」の事務局として、テキパキと差配されていたのを、駆け出しのオブザーバーの立場で拝見し、感心していたのを良く覚えている。そんな訳で倉嶋さんと仕事でお話したのは、気象学会の理事として、倉嶋さんの名誉会員への推挙の事務手続きで、2010年に東京目白のマンションの9階を訪問した時である。まず驚いたのは、蔵書や資料が幾つもの書架に収まり切らず、部屋のあちこちに山積みされていたことと、別の階のもう一つの部屋を書庫にされていたことである。倉嶋さんの恐らく100を優に越えるだろう著述や講演、さらにテレビでの出演は、このような膨大な資料に裏打ちされていたのかと感服した次第。

私の手元にある「日本の空を見つめて一気象予報と人生一（岩波書店）」は、その時に頂いたもので、帯封には「季節の流れや雲、雨、風といった身近な気象から始まる思索の旅。60余年にわたって気象の現場を歩んできた著者の日本の空と人生への思い」と記されている。読み返して見ると、端々に著者の天気や気象に対する細やかな視点と人生観、そして古今東西の書

に通じた小話などが、詩情豊かに描かれている。帰り際、そうか倉嶋さんはこの9階からも空を眺められていたのかと、一緒に窓際に寄ってみた。

あまり知られていないが、倉嶋さんの奥様は上述の養成所の女子専修科の出身で、卒業後は倉嶋さんと同じ予報課勤務だった。戦後の労働運動が高揚期を迎えていたさなか、1950年にGHQ（連合軍総司令部）が共産党員の排除を目的に発出した「レッド・パージ」の波が中央気象台にも押し寄せた。彼女も巻き込まれたが、その理不尽さに抗して自ら職を辞された。倉嶋さんは、そんな彼女の美学を清楚で可憐に見えたと述懐している。二人が結ばれたのはその2年後である。倉嶋さんの根底にずっと流れていたと感じたりベラリストの振る舞いは、若き日のそんな彼女の行動と結婚のせいではないかと思える。自分の執筆活動やテレビ出演は、妻の献身的な支えがあったからこそと述懐されている。二人は二人三脚、「比翼の鳥」だった。

また、何よりも印象的なのは倉嶋さん自身の人柄だ。メガネの奥から微笑むような眼差しで語られる独特の口調とオールバックのロマンスグレイの風貌。倉嶋さんは、そんな人柄を買われて1984年に退職後の翌日にNHKの解説員に招かれ、お茶の間の人々に、身近な気象や天気を素材に、何かほっとした安心感を与え続けられ、天気キャスターの名を欲しいままにされた。テレビで「西高東低」の天気図に向って、両手を揃えて左上から右下に掃くように北西の季節風が吹くさまの説明などは今も脳裏に鮮明だ。

上述のような倉嶋さんの活動と功績を讃えて、日本

気象学会は、2005年「季節と天気に関する動気候学的研究と気象解説による気象学・気候学の普及に対する功績」で「藤原賞」を贈り、さらに2011年「気象学の啓発活動、民間気象業務の推進への貢献」で名誉会員に推挙した。また運輸省からは「交通文化賞」、NHKからは「放送文化賞」、日本気象協会からは「岡田賞」を受賞され、また第1回国際気象フェスティバルベストデザイン賞（フランス）、勲三等瑞宝章を授けられている。

倉嶋さんは何しろ多才であった。独学でロシア語を学ばれ、何度か旧ソ連を訪れている。「光の春」という季語はその際に見聞されたロシア語の翻訳だという。また「熱帯夜」は倉嶋さんの造語だ。

最後に再び私事だが、倉嶋さんと在職中に面談したのはただ一度だけ。1989年に予報部業務課から福岡管区気象台技術部長で転勤の際、すでにOBになっておられた倉嶋さんがわざわざ部屋にお見えになって、激励の饞別を頂いた。それまでお顔しか知らなかった先輩の気配りが嬉しかった。以来、20数年の歳月が流れ、お会いする機会は毎年秋に開かれる「予報部予報課OB会」のみ。乾杯の音頭では何時も一味違う語り口だったが、今年はまだ聞かれないと思うと寂しい限りだ。つい最近、「倉嶋さんを偲ぶ会」の案内が届いた。主たる発起人は「天気キャスター」という、やはり倉嶋さんの人柄だ。倉嶋さんのご冥福をお祈りするとともに、後塵を拝しながら、一歩でも師に近づきたいと思っている。

（気象コンパス 古川武彦）